しんぶん赤旗 2025年8月16日

靖国は単なる神社ではない

靖国神社＝15日、東京都千代田区

靖国神社は、戦前・戦中に侵略戦争推進の精神的支柱となりました。戦後も、日本の侵略戦争を「自存自衛の正義のたたかい」「アジア解放の戦争」と美化する「靖国史観」を世界に発信している運動体で、一般的な宗教法人でも戦没者追悼の施設でもありません。

前身は1869年設立の「東京招魂（しょうこん）社」で、幕末の内戦で戦死した新政府軍の将兵をまつり、79年の明治天皇の勅命で「靖国神社」に昇格しました。

当初から陸軍省・海軍省など軍事当局が管理。天皇・国に忠義を尽くし「名誉の戦死」をした軍人などを「護国の英霊」としてまつることで、天皇のために命をささげることを美化し、侵略戦争を正当化する役割を果たしました。

1882年に境内に開館した軍事博物館「遊就館」は、現在も「英霊の『みこころ』と『ご事蹟』を知る」施設として、靖国史観を宣伝する特異な展示を行っています。

A級戦犯を合祀（ごうし）しているのも大問題です。靖国神社は1978年、東京裁判で戦争指導者として死刑になった東条英機元首相ら14人を、戦争犯罪の〝ぬれぎぬ〟を着せられた「昭和殉難者」として合祀しました。このため、靖国神社に合祀されている戦没者の遺族にも、複雑な思いをもっている人は少なくありません。

8月15日の終戦記念日は「戦没者を追悼し平和を祈念する日」として設けられました。この日に閣僚や国会議員が、侵略戦争を賛美しA級戦犯を合祀する靖国神社に参拝することは、侵略戦争を肯定し、その責任者をたたえる意思を国内外にアピールするものです。

日本に降伏を勧告し、侵略戦争を推進した軍国主義勢力を「永久に除去」すると明記したポツダム宣言を日本は受諾し、同宣言は戦後日本の出発点となりました。靖国神社への閣僚や国会議員らの参拝は、同宣言を真っ向から拒否し、戦後の世界秩序に挑戦するもので、憲法が定める政教分離原則（20条3項）に反し、平和主義（9条）を大きく突き崩すものです。

また、何よりも侵略戦争の被害者であるアジアの人々や日本国内の犠牲者を踏みにじるものと言わなければなりません。

（田中佐知子）